



ポスト東日本
大震災時代の
東北の生活

神田雄大

「おはよう、恵子。今日の天気はどうだい」。
修司はダイニングに入ってきて、コーヒーメーカーからコーヒーをカップに注ぎながら、妻に尋ねる。
まだ寝間着姿だ。
時計の針は8時を指している。
「今日は、午後から雨みたいですよ」
「なら、午前中のうちに燃料電池でお湯を沸かして、午後は買電するか。恵子は今日は在宅の日か？」
「ええ、今日は在宅です。子供たちも午後には帰って来ます」
「なら、電力に余裕を持たせておくか」
修司はそう恵子に訪ねて、ダイニングに設置されているスマートメーターを操作した。
「あなたは今日は沖に出るの？」
「いや、養殖場を見に行くだけだ。夕飯前には帰る。さて、学校に行くぞ」
そう言うと修司は、武と洋子の息子と娘を玄関から出し、交差点にある、通学バスの集合場所に向かって行った。
通学バスが来た。
無人の電気自動車だ。
中から、女性教師が二人に声を掛け、二人は乗り込む、学校へ向かった。
修司は共有自動車ステーションへ向かい、そこで小型車へ乗り込んだ。
カードをかざすとモーターが始動した。
ハンドルを握り、アクセルを踏み込み、養殖場へ向かった。

修司の家は高台の住宅団地にある。
修司は漁師と言うか、養殖場の社員だ。
10年前の震災後、東京から東北へIターンした。
最初は、復興のための建設要員として働き、街が出来上がったと同時に養殖場の社員になった。
妻の恵子は地元出身で、東京に住んでいる修司の両親からは原発被害で子供が作れないと反対を押し切り結婚した。
しかし、無事子供も二人設け、今は人並みには幸せな生活を送っている。

高台の住宅地から、港に降りるにはエレベーターを使う。
エレベーターに自動車を乗せると自動的に上下する。
修司はエレベーターから、見える港の風景を見て、ちょっとしたことを感じた。
<10年前、ここに来た時には瓦礫の山で、俺は地獄に来たかと思った。が今は、収入もそれなりにあるし、幸せな場所になった>
エレベーターを降りると港だった。
そして、養殖場に向かった。

職場に着くと、まずはパソコンのディスプレイで個々の魚の状態をモニターした。
何匹か生育がよくないのがいる。
結果をまとめてプリントアウトして、上長のところに持っていった。
上長はもともと原発の職員だったが、震災後、養殖場に転職した。
上長は、プリントアウトされた用紙を見て、いろいろ検討して、口を開いた。
「これなら、今月の出荷には問題ないだろう。ただ、今後の課題ではあるな。何が問題なんだ」
「はい、水温が少し低いようです。季節的要因です」
「では、先方の外食チェーンへはその旨のレポートを頼む」
「承知しました」

一方、恵子は自宅でシステムのプログラミングの作業をしていた。
そこにSkypeで着信があった。
プロジェクトリーダーの川辺からだ。
川辺は東京の本社で働いている、根っからの江戸っ子だ。
多くの人達が、フロンティアを東北に求める中、エリート街道を選び、東京で働くことを選んだ。

「ちょっと、既存モジュールに不具合があるようだが、レポートは見てくれたか？」
「ええ、今、見直しをしています。原因は変数の初期化ミスのようなのです」
「いつまでにリリースできる」
「テストして、午後にはリリースできると思います」
「じゃあ、あとは頼む」
「はい」

時計は一文字になっている。

18時だ。

恵子は夕飯の準備が終わり、子供たちはテレビでアニメを見ている。

そこに修司が帰って来た。

「あなた、お疲れ様」

「パパ、お帰り」

「ただいま」

「ご飯できていますけど、先にお風呂入りますか？」

「いや、お腹がぺこぺこだ。お前たちを待たせるのも申し訳ない」

「じゃあ、汁物を温めます」

そうして、ダイニングで家族4人で夕食が始まった。

ポスト東関東大震災時代の東北の生活

<http://p.booklog.jp/book/22704>

著者：神田雄大

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kandayudai/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/22704>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/22704>